

放射線科学

日本最初の放射線科医、藤浪剛一

玉木 正男

聴診器を使わない、薬をくれない、メスも使わない欧州帰りの医者として有名な藤浪剛一が、順天堂医院レントゲン科から慶応大学に新設の医学部に専門の教授として迎えられたのは1920年（大正9年）であった。慶大病院では藤浪は、レントゲン線（X線）による診断治療を主に行っただけではなく水治療法、マッサージ、電気治療など物理的エネルギーを人体に与えて行う診療をふくむ部門を主宰したので、意味の広い理学的診療科という科名を用いた。これは、それ以後に二三の大学でも用いただけでなく、一般に今も用いられる診療科名ではあるが、その後物理的エネルギーのうちでX線及びそれと同様の電離作用をもつ放射線を出す放射性物質を使用する分野が特に「放射線科」と呼ばれるようになった。放射線科は1950年代に入るとわが国でも先進諸国と同様に医大の必須講座、必修科目になり（脳神経外科、麻酔科よりも先行）、また公認された診療科名としても普及して来たのは周知の通りである。なお、現在では欧米諸国と同様、わが国でも、放射線科専門医（社団法人日本医学放射線学会の専門医制度にもとづく）が続々みられるようになった。

1880年名古屋に生まれた藤浪剛一は、若くして世界医学の中心であったオーストリアのウィーン大学に留学し、臨床医学の新しい分野、放射線科学を専攻した。1909～1912年の足かけ4年間である。ウィーンの国立大学病院 *Allgemeines Krankenhaus* は近代的大病院になったが藤浪の留学当時の建物も現在使われており、昔の正門をくぐると胃切除手術を初めて行った *Billroth* の大きい立像が我々を迎えてくれる。外科学の *Billroth* 教授、神経精神病学の *Jauregg* 教授（麻痺性痴呆の研究でノーベル賞受賞）は、臨床医学が分化しそれぞれ専門化して行くことが医学発展の基盤をなすと強く主張するウィーン大学の指導者であったという。

ドイツの *Roentgen* 教授は、1895年12月X線を発見した直後、昔研究室の同僚だった *Franz Exner*（ウィーン大学物理学教授）にその詳細を速報した。

それで、ウィーンではいち早く物理学者と医師たちの協力で、手の留弾、前腕骨折のX線写真が撮影できて治療に有用なことが医師会で報告され、X線発見からわずか一カ月後の「ウィーン臨床週報」（1896年1月23日号）には小指の骨折のX線写真が死体の手の血管造影写真（石灰粉を水にといて注入）と共に掲載されているのは注目すべきである。

ウィーンでは、このように他に先きがけてX線診療が進展、普及して行き、激増する患者に対して医師が他の仕事の片手間に確実に実施できるものではないとみられるようになった。やがて、上記の先覚的指導者の主張も強く働いて、レントゲン学、放射線科学を独立の専門学科と認める情勢になったと思われる。そうして1904年にはウィーン大学は初めて放射線科学の *Dozent*（講師に相当）の学位（*Dozent fuer medizinische Radiologie*）をレントゲン医学専攻の先人 G. Holzkecht, R. Kienboeck, L. Freund の三人に授与している。若い藤浪はこのような環境で留学生活を送ったのであった。

藤浪はウィーンの代表的な二病院 *Allgemeines Krankenhaus* と *Poliklinik* の放射線科で、それぞれの科長 Holzkecht（後に教授）と Kienboeck（後に教授）の指導を受けた。そして Koichi Fujinami のドイツ語論文8編が欧州の専門医学誌に残されているが、うち4編は前者における胃のX線検査、2編は後者における手根骨のX線検査の研究である。

Kienboeck 氏病としてドイツ系医学だけでなく英米医学でも周知の月状骨（手根骨の一つ）に起る軟化症を Kienboeck が報告したのは、1910年でドイツ系のレントゲン学専門誌 *Fortschritte* 誌上であった。翌1911年、藤浪は同じ誌上に「手根骨の化骨」の研究を8ページの論文として発表すると共に、ベルリンでの第7回ドイツ・レントゲン学会でその要旨を講演している。この研究は、小児の骨の発育状況（骨年齢）をX線で検査できることを詳細に報告したものであった。X線被曝は少なく、同じ患者で年を追って追究できる簡単な骨発育診断の方法（現在でも病院放射線科で日常実施される）を、80年前に確立した画期的な研究といえよう。なお藤浪は、小児の骨疾患佝僂（くる）病における手根骨X線検査についてのドイツ語論文の他に、帰国後には足根骨の化骨についての日本語論文も発表しているが、これには、古来日本では15才で「元服の礼」を行うが、丁度そのころに骨が完成するのを科学的検査で知るに至ったと藤浪らしい考えを述べている。

後年、藤浪はオーストリア・レントゲン学会の名誉会員にえらばれているこ

とをここに付記したい。

藤浪は尾張徳川藩の御典医の旧家に生まれたこともあって歴史に詳しく、日本医史学会の創立者の一人でその会長もつとめた。また藤浪夫妻は同志と共に「東京名墓顕彰会」を創立し、あるいは昔の文化人の埋もれた墓を回る「掃苔会」を主宰した。

筆者は1936年から1942年まで慶大で藤浪教授に師事したのであった。病院のレントゲン室で診療の第一線をきびしく指導された先生のおもかげを偲ぶうちに、次のことを思い出す。当時の大相撲は横綱四人が技を競う全盛期にあったが、腰椎の病変のためたびたび病院へ来て骨のレントゲン写真をとられる横綱がいた。その横綱に対して先生は「大関、写真をとる間は息をとめて下さい」、「大関、すみましたよ」と大声で言う。大関と呼ばいかけられて横綱は内心怒っているだろうというかげの声。しかし、本来は大関は関取としての最高の「地位」であり、大関のうちで横綱をしめることを許される一部のものに与えられる「称号」が横綱であったのだが、その後横綱を大関の上の「地位」と考えるようになったという（「広辞苑」による）。医学士が医学博士の称号を大学から受けても医学士であることには変わらないのと同じだと、同僚の物知り博士に教えられた。故事に詳しい先生は果たしてご存知だったのか。

先生は1942年11月、心筋梗塞で逝去された。名古屋市覚王山、日泰寺の藤浪家代々の墓に葬られている。

（藤浪剛一先生五十回忌の年、1992年12月記）

（大阪市立大学名誉教授）